
If ariveD

宮利 衛斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

If arrived

【Zコード】

N4071A

【作者名】

富利 衛斗

【あらすじ】

とある一人の学生がひょんなことをきっかけに友達になった女の子、その子は人間じゃなかつた。主人公はそんなことを気にもかけなず、普通に接していく。ある時、女の子は主人公の目の前で・・・

「だつて、なんとかならない? メイデン」とある mailを見て、後ろを見ながら言葉を放つ。そこには一般人には空氣と認識できる空間しかなかった。だがその大氣しか存在しないはずの空間からは可愛らしい少女の声が響く。

「気になるつてんだし、教えてあげたら?」
メイデン、それが空間からする声の主だつた。
彼女はメイデン、ボク、圭介がつけた名前だ。
名もないただの浮遊靈でしかなかつた彼女を圭介が手を差しのベ友達になつた。はるか100年以上昔、彼女はイギリスの奥地で謎の急死。

その後、日本にたどり着いた。

が、知り合いもいない彼女は途方にくれ、ひたすらに泣き続けたといふ。

そこに圭介は現れた。

「いやだつて一応、あれだしさ」

言つて良いものかと戸惑う、しかしメイデンはメンドクサイからか言つてしまえと圭介を促す。

いいじゃん、知りたいって言うんだもん

多少強引である、それが彼女だ。

容姿とは裏腹に積極的であり、強引、だけど時折かいまみせる表情はいかなる生物であるうと見惚れるであるう可愛らしいものだつた。

「うーん、だけど知に悪いしな」

彼女の催促に多少反発の色を見せる。

知とは圭介の友人のひとり、義理の妹を持つ一学生だ先程から話題になつてゐる教えてやれ、いや悪いのやりとりは、拓海に mail で聞かれた内容、さくらつて知の妹の名前なの? といつもの。

その知に悪いという意識から圭介は返信に困っていたそしてメイデンに話かけたのだ、結果今に至る訳なのだが。

「うーんまあ仕方ないか、つと」

妹の名前という肯定の m a i l を拓海へと送る。

「これでいいんだろ？」

「そついい子だいい子だ」

クスクスと笑い、圭介を見る。

「なんだよ、お前が送れって言つたのに」

何故か笑われたことに照れ臭さを感じ、メイデンから目を背ける。

それに対しメイデンは当然の如く圭介をからかう。

「ああ～照れてる、私に誉められたのが嬉しいの？」

圭介が目を背けた方向に周りこみ顔を覗きこむ。

「つ！」

可愛らしい純真な顔、圭介自信あきらかに自分とは不釣り合いと認識する女の子それを目の前にし赤面する、そして赤面を自覚する。

「ふふ、圭介は照れ屋だね」

微笑み顔を横に傾け覗き込む。

「別にそんなんじやないよ、ただ」

その先の言葉につまる。

「ただ何？」

先が気になるのか、答えるよう促す。

「別に、さてともう寝る」

答えを曖昧模糊のままにしぶらずに登り冷たい布団に潜り込む。

朝起きたままのグチャグチャになつた布団を足と手を使い直していく。

く。

どんなに綺麗にしても結局は冷たいまま、暖かくなんてならない。

ただ昔とは違い、今は隣にメイデンという少女の居るおかげで心はもの凄く、有り余るくらいに暖かかった。

翌朝、土曜日。

今日は学校が休み、バイトも休み、全てが休みの珍しく休養がとれ

る数少ない日、圭介はまず側で意味もなく眠るメイテンに声をかける。

「おーいメイテン、朝だ起きろ?」

側で寝てこるとこに異論を感じずメイテンを起しきす。

「つーん、幽霊は朝が苦手ー、だから寝るの」

ゴーラゴーラと寝惚けた口調で寝返りをうつ。

「寝る意味も無いのに良く言つみな」

苦笑しダルい体をベッドから下ろす。

とりあえず、数分ベランダからランダマークタワーをボーッと見つめる。

眠気からか景色がゴラゴラと歪んで見える。

なんか世界が回転してゐるよ^{うな}・・・

「く・・・

違う、眠氣で歪んでゐるのでは無い。

これは俗に言つ田眩。

ただ、普通の田眩とは違い、自立神経系の失調からくる特殊なものだと言われている。

「くそ、またかよ、毎度毎度、気持ち悪・・・」

ついには吐氣まで催してくる始末こうなつたら、立つてなんかいられない、目を開けてこむとすら難しくなつてくるたちの悪い精神病。

これが憎くて仕方がない。成す術もなく、先程まで安眠を分け与えてくれていた布団へと戻る。

「どうしたの圭介、また田眩?」

寝惚け眼を擦り、もう一度布団へと戻ってきた圭介に声をかける。

「みたいだ、これまた神様も酷いな、数少ない休みを田眩で潰さすなんて」

と、神様に文句を言つても仕方がない。

運命だと思つて素直に受け入れる他ならないと圭介は感じる。

「それは、辛いね、じゃあ私ここで圭介の介抱してあげるよ

狭いベッドで幅を取る正座をして圭介を見る。

「いいよ、いいよそれよりボクも寝る訳だし、幅取るから下で時間潰してた方が楽しいぞ、どつか飛び回るとかね」

実際幅を取るのなんかどうでも良かつた、ただ年頃の少女が側で自分を介抱するということに抵抗があつた。

「それに、メイデンは何か未練を満たす度に成仏しちゃうんだから、あまりこーゆうのも良くないと思つし」

そう、メイデンは未練があつてこの世にとどまつている。その未練とは彼女から聞かされていないが、彼女が話してくれない限り、無駄に詮索する気もなかつた。

そして未練が完全に無くなつた場合、結果成仏して消えてしまつ。そんなことは絶対に嫌だつた。

せっかく巡り会えたのだ、もう離れたくない。

彼女もそうであつて欲しい、圭介はそう望んでいた。

「大丈夫だよ、私の未練はこんな介抱とかじやないしね」

「そうか、まあ好きにしてよ、ボクは寝るから」

そう言つてまぶたを落とす、目の前には漆黒ばかりが広がつていた。

「・・・ん？」

いつの間にか、外は夕暮れ時になり、紅色の空が広がつていた。

「四時半、そんなに寝てたんだ」

だいたい五時間くらいだろうか、そのくらいの間ずっと眠つていた。そして隣にはメイデンがいた。

ここにんなしか姿が薄くなつたメイデンが。

「あつ、起きた！ もう平氣なの？」

圭介の思考を遮るようにして調子を訪ねる、本人には思考を遮るそんな気は無かつたのだろう。

が、圭介には遮られたようにしか感じられなかつた。

「だいぶマシかな？ まだ少し氣分悪いけど」

世界が回る感じがしなくなつただけ、まだマシと言つものだ。

それだけ回復していくところ「う」とだし。

「そ? 良かつた」

回復したといふとを告げるとメイデンは表情を緩めここやかになつた。

「じゃ、もう平氣だね!」

「まさか、ずっとここにいたのか?」

「うん、暇だつたし」

何普通に素氣なく答える。五時間もの間つきつきりでこの狭い空間にいたなんて、考へるだけで体が痛くなる。

「それに、なんか楽しかった・・・かな?」

微笑み、背を向ける。

その姿を見て圭介はふと思いつ出す。

起きた瞬間に見たメイデンが心なしか薄かつたこと。

「てか、メイデン、なんか薄くなつてないか?」

「え? え? そんなことないよ?」

少し拳動不審になりながらも必死に弁解? をする。

実際、そんなにハツキリと分かるほど薄くなつてるとか分からぬ。ただ、長い間の付き合いでなんとなくそんな気がしただけの話であり、確信など全くな。

「ならいいけど、ありがとな? わざわざ傍にいてくれてさ」照れ隠しに鼻頭を搔きながら礼を言つ。

「ふふ、いいのなんか嬉しかつたし」

この笑顔がたまらなく好きだった

翌日日曜日

ふと田が覚めると、体を起すのがつらかった。

頭も痛いし、喉が痛む。

「まさか風邪とか無いよな」

体の節々が痛む中、必死に体温計を持ち出し脇の下に挟む。冷たい体温計が体を刺激する。

ピピッと音が鳴りだるい手を脇の下に伸ばし体温を確認する。

38・2・・・

「はあ！？ マジかよだる～」

完全に風邪であることに間違いは無かった。

「圭介、風邪？」

心配になつたメイデンが圭介の傍へとやつてきて体温計を見る。「わつ高い！早く寝ないと」

「ゴメンな～、昨日に続いて今日も・・・ボクなんか放つといてもすぐ元気になるからメイデンは気にしなくていいから」

昨日ずっと付きっきりだったメイデンに謝罪をする。

「いいから、早く寝て」

半ば無理矢理にベッドに寝かし、布団を首もとまでかける。体温が高いからかえつて暑いが、あえて何も言わない。

「それに、私こ～ゆうのなんか嬉しかつたりするし」

急に神妙な顔付きになつて話を始める。

「これが私の未練、望みだからね」

「それって！」

だるい体を起こし、メイデンを一直線に見据える。

「昔、高熱に苦しんでる兄様を助けてあげられなかつた・・・ずっと一晩付きつきりで見て、た、のに・・・」

つぶらな瞳に僅かに涙が溜り始める。

「悔しかつた、兄様を助けてあげられなかつたのが、だから次は助けるそう決めたとき、気付いたら私死んじゃつてた」

それが、メイデンをこの世に留めている理由だつた。誰かが病氣で苦しんでいる時、横で必死に看病し助けてあげる。それが彼女メイデンのたつた一つの望みだつた。

顔に水が落ちる。

見るとメイデンは涙を流していた。

「泣くなよ」

それだけ口にし触れるはずもない靈体の顔に触れそつと涙を拭う。

涙はしつかりと実体を持ち、確に指は濡れた。

「触れる、圭介に触れる触つてもらえてる、私消えるんだ……」
メイデンが実体を持った。それは神様が最後の最期、成仏する瞬間に与えてくれた奇跡だった。

この瞬間を、

少しでも、

有効に、

使う。

「なあ、ボクずっと言いたかったことが」

言葉の途中そつと人指し指が口の前にそれられる。

「知ってる、私もだから

心が一つになった。

そして、顔を近付ける。

少しずつ少しずつ・・・

「ばいばい、圭介・・・」

唇同士が重なる一步手前、あと数センチといつひとつで、メイデンは圭介の前から一瞬にして姿を消した。

「メイデン・・・」

「メイデン、メイデン」

ひたすらに彼女の名前を呟く。

「なんでだよ！おかしいだろ！消えんなよ！おー！ー！」

誰もいない部屋で力の限りに叫ぶ。

「帰つて・・・来いよ・・・メイデンー！ー！」

枕に顔を埋めて泣いた。

枕が涙で濡れるまで、メイデンにこの気持ちが届くよう。

「あれから1年・・・か

メイデンが消えてから1年が過ぎた、今日1月2日何と言ひ理由もなく、大好きな景色も見えるお気に入りの場所へと歩を進めた。

あの日以来、なんのやる気も起きなく、他の女の子になんか興味も

沸かなく、彼女が頭から一瞬たりとも消えることは無かつた。
繋がつた想い。

交されるはずだった愛の誓い。

その最中、彼女は目の前から一瞬にして消えた。

無事に天国へ着けただろうか、幸せに暮らしているだろうか。
そんなことを急に寂しくなつた背中と共に空を見ながら思つ。
あの日空は快晴だつた。

彼女の心を映し出したかのように澄みきつた青。

「今日も快晴だな」

寂しくなつた背中に話しかける。

当然返事など有るわけもなく、声は消える。

「もう、帰るか・・・」

お気に入りの景色から田を離し、後ろを振り替える。そこには、ひとりの少女が立つていた。
どこか見覚えのある。

いや見慣れたその姿。
具現化されたその姿。

それは

「メ、メイデン・・・?」

そういうつか消えた靈、メイデンのそれと酷似していた。

「メイデンなのか?」

夢中でその少女に問掛ける。

「圭介・・・そうだよ、私だよ」

涙が溢れた

目の前にいるのは正真正銘いつかのメイデンだつた。

「圭介!」

彼女も瞳に涙を浮かべ、空中に煌めかせ小走りに圭介の元へと駆け寄る。

そして、圭介はそつとその柔らかい形のある実体のある身体を抱き締める。

「どこに行つてたんだ、メイデン」

大好きな景色を背にメイデンを問う。

「じめんなさい、お出掛けしてたつて」としてね

微笑む、そして寄り添う。

「出かける時くらいボクに一言言つてくれよな」

「えへへごめんなさい」

背中が暖かい、何故か先程までの冷たさと不甲斐無とも完全に消え、

目の前の少女が胸に広がり、暖かさだけを残す。

「あの時、できなかつたあれ・・・」

顔を微かに紅く染め、圭介を見る。

「ああ・・・」

照れて、それ以上は何も言う事が出来ず、そつと体を近付け密着させる。

そして唇が重なる

今度こそはしつかりと確実に。

もう離れない、離さない、その想いと共に。

「これからもずっと一緒にだ、な?メイデン」

「うん!圭介」

涙を拭い、満面の笑みを浮かべ答える。

これは、ボクとメイデンのこれから始まる
ただ一つ、世界でたつた一つの

『恋物語』

(後書き)

どうも富利衛斗です。いつも書を上げた記念すべき一作目ですが、いかがでしたでしょうか？ありえない話の詰め合せですが、楽しんで頂けたら、幸いです（笑）では機会があつたらまた、お会い出来る事を祈つて

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4071a/>

If ariveD

2010年10月21日07時10分発行